

大学の取り組み

特別支援教育 研究センターの設置

特別支援教育研究センター長

岩坂 英巳

学校教育においては、平成19年度から特別支援教育が全面的に展開され、従来、特殊教育の対象となっていたいなかった学習障害（LD）、注意欠陥多動性障害（ADHD）、高機能広汎性発達障害（PDD）など、通常学級に在籍する軽度発達障害を持つ子どもたちへの対応が課題となっています。

このため、本学ではこれまでの研究教育と地域との連携の実績を踏まえ、「特別支援教育高度実践モデルの開発・推進事業」を実施することとしました。特別支援教育にかかわる教育研究の課題に対応して、有為な人材の育成と地域の特別支援教育への支援を充実し、地域の期待に応え、教員養成大学としての責任を果たすため、平成19年3月23日に特別支援教育研究センターを設置し、医療、心理、教育等の専門性を有する専任スタッフを配置しました。

センターは、「教育実践支援部門」「発達支援部門」の2部門から構成されており、教育実践支援部門は教育関係者向けに教育相談を地元の教育委員会との連携を図りながら、実施しています。発達支援部門は、本人・保護者向けに発達相談、心理発達検査



開所式にて（右側）

査、コンサルテーション、親子並行面接、巡回専門相談を有料で実施しており、ペアレントトレーニングやソーシャルスキルトレーニング（SST）などの専門プログラムも実施しています。

また、ペアレント/ティーチャートレーニング指導者養成講座、SST体験講座など人材養成のための研修会や一般向けの公開講座などを開催しています。

今後、学内外に認知された特別支援教育の高度実践モデルを推進するセンターとして地域に根ざした継続的な事業を展開していく予定です。

特別支援教育研究センターのホームページ

<http://www.nara-edu.ac.jp/CSNE/csn-index.htm>

奈良教育大学天文台の復活

理科教育講座・准教授

和田 穰隆



修理完了した反射望遠鏡の搬入作業のひとつコマ

奈良教育大学には天文台がある。理科一号棟の東端の屋上、銀色のドームがそれである。中には口径30センチメートルの反射赤道儀が設置されている。平成19年3月末、このドーム及び望遠鏡の修復が完了し、天体観測・観望に使えるようになった。そもそもこの天体望遠鏡は昭和46年3月末に設

置され、長らく天文学分野の研究・教育に活用されてきた。筆者も本学の学生であった頃、この望遠鏡で観測した経験がある。だがその後は望遠鏡の老朽化が進むと同時に機能が時代遅れとなり、また天文学分野の教員が退職・不在となった。このため、その存在がほとんどの人の記憶から失せかけていた。

望遠鏡を修復することになったきっかけは二つある。一つは学部講義「天文学」の担当（当時）であった和歌山大学の富田晃彦先生からの助言、もう一つは本学で実施中の「新世代を先導する理数科教員養成プログラム」（先導理数）の始動である。富田先生は、集中講義にいられた際に天文台を御覧になり、修復についてのアドバイスをされた。事実、月や星は児童・生徒の非常なる興味の対象の一つであり、本学の理系学生においても天文学を勉強したいという者は少なくない。そこで地学教室として望遠鏡の修復を模索し始めていた。丁度その頃「小・中・高の理数科の内容を深く理解し、それらの積み上げを一貫して見通せる専門性を持った教員の養成」を目的とする先導理数が平成17年度から始まったのである。多くの教育研究機材が手当てされる中で幸い望遠鏡・天文ドームも修復されることになった。

現在、天文台では天体観測・観望ができるよう準備を進めている。その設置・調整中に一度、望遠鏡で土星を眺めたことがある。昔と変わらず、土星はとても美しく「可愛い」天体であった。星を見ることは、自分たちの星と違う星があることを認識することである。その認識を多くの人に持つてもらいたいと思うし、とくに子どもたちと、子どもたちを教える理科の教師には尚更である。今後、星を見る機会を、本学の新しい天文台を使って計画・実施していければと考えている。願わくば、その折には学内の灯火、とくに街灯やグラウンドの照明設備を是非とも消していただきたいと思う次第である。

大学の取り組み

オープン・サイエンス・ラボ

融合理数G P代表・教授

松山 豊樹

「オープン・サイエンス・ラボ」は、文部科学省の「平成18年度資質の高い教員養成推進プログラム（教員養成G P）」に採択された本学の教育プロジェクト「高大融合による理数科高校教員の養成」（略称：融合理数G P）で、その設置・運用が企画・立案されました。プロジェクト始動後、実験室のレイアウトを固め、改修工事を経て、平成18年12月1日、理科2号棟2階の一角に設置されました。

オープン・サイエンス・ラボは、高校での理数科教育を支援するために学内に設置された地域の高校に開かれた実験室です。その目的は高校生、高校現職教員、本学学部生・大学院生、大学教員が一体となり、実験を中心とした活動を通じて本物のサイエンスを楽しむ場を提供することにあります。そのため、教育研究員を中心とした実験機器の保守・管理、実験メニューの開発や実験用マニュアルの作成が続けられています。

また、現職の先生たちに実際に実験機材を使ってもらい、高校の授業で活用して頂くために機材の貸し出しも計画しています。現在は、融合理数G P連携協力校を中心にオープン・サイエンス・ラボの運用が行われていますが、ゆくゆくは少しずつ連携協力校を増やし、広くオープンにする予定です。

もう一つの重要な役割は、現職高校教員による融合理数G P参加学生への教材・カリキュラムの研究・開発を指導する場を提供することです。現在、週2回のペースで実際に連携協力校の現職教員に大学に来て頂き、より実践的な指導が続いています。この8月には、現職教員、本学学部生・教員の連名で、その成果が学会発表される予定で、全国的にも突出した取組となっています。また、現職教員自身が生徒

への指導のスキルを上げるために、

大学教員と連携して教材・カリキュラムの開発を行っています。既に、大手民間企業が公募した教材コンテストに応募し、賞を受賞するなどの目覚ましい成果を出しています。平成19

年5月23日、文部科学省結城事務次官の視察があり、本プロジェクトの激励を受けました。

オープン・サイエンス・ラボは、決して広くはないスペースです。そこに、数々の実験機材が置かれ、訪れた人は「狭い！」と思うことでしょう。しかし、常時、実験や教材・カリキュラムの研究・開発ができるスペースが用意されていることの効果は絶大です。今後も、本学の理数科教育の拠点として成果を挙げ続けるものと期待しています。



デジタル分光計のセッティング

奈良教育大学で 保育士養成がスタート

学校教育講座・准教授

横山 真貴子

■保育変革の時代の中で

奈良教育大学で保育士資格が取得できるようになりました。幼年教育専修の今年度4月入学の学生からです。これからの幼児教育の担い手には、幼稚園教諭の免許と保育士資格の両方を持っていることが必要になってきているためです。

国レベルでは、昨年10月に幼保一体化施設として

の「認定こども園」制度がスタートしています。幼稚園、保育所といった、従来の枠では捉えられない、新たな保育のあり方が求められているのです。また、奈良市近隣を含め地方の市町村では、少子化に伴い、幼稚園と保育所との人事交流の必要性もあって、従来から幼稚園教諭と保育士の免許・資格の併有が採用の条件となっています。

こうした状況のなかで、これまで奈良教育大学の学生は、自分で「保育士試験」を受験し、資格を取得していました。しかし今や、多様化し複雑化する保育ニーズに対応していくためには、受験して「資格を持つている」だけでは不十分です。資格の中味が問われるのです。

■誕生から児童期を見通した学びと経験を

これからの保育者には幼稚園教諭の資質に加え、保育士としては特に乳児期からの福祉的な観点、子育て支援の視点が必要です。幼保が一体化する中で、さらなる新たな資質も求められます。

奈良教育大学では、「今、保育者に何が必要か」について、保育所、幼稚園、保健所、保育行政、他の保育者養成大学と共に語り合い、築きあげ「保育フォーラム」を開催しています。本学の幼年教育専修では、保育士、幼稚園教諭とともに、小学校一種免許も取得できます。保育変革の大きな波にのまれることなく、今を生きる子ども

たちに必要な支援を、誕生から児童期を見通して行っていく。そうした力量を備えた保育者の養成を、地域と連携しながら、いっそう進めていきます。期待していただきたいと思います。



保育フォーラム